

Vol.18
2022年
春夏秋冬

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美)
<http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html>

発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとりえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

民衆の語り芸能、説経節
遊芸人が運んだ「救いの物語」

説経節は日本の中世末から近世にかけて盛んだった語り芸能で、仏教の唱導(説教)から派生して成立した民衆芸能だと言われています。近世には、操り人形として小屋で演じられて人気を博し、江戸時代の元禄頃までがその最盛期でした。内容の多くは、つらい境遇においても、やがて一筋の光が差すことを教える「救いの物語」。こうした哀話、遊芸人たちによって街道筋を運ばれたと言います。

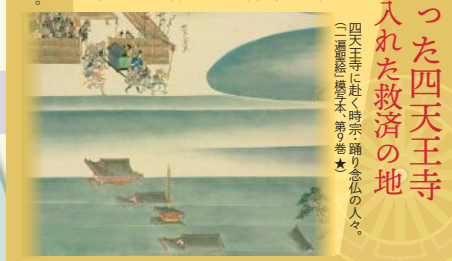


日本の仏法最初の官寺、聖徳太子の発願で、鎮護国家と万人救済の実践所として、上町台地に創建された四天王寺。やがて、その西門・石の鳥居は、極楽の東門と呼ばれるようになり、平安時代末期から中世へ、西方に広がる海を眺め、夕陽の向こうに極楽浄土を重ねて拝む、聖なる地に。動乱の時代、そこは、苦しみ、果てを生きた人々が、救いと再生の物語を求めてやまない、無縁平等の広場ともなり、また、苦難の境涯から、四天王寺を経て、復活する主人公と連れる道行。さらさらを擦りながら語る説経節が現れる。能や浄瑠璃・歌舞伎、落語・講談・浪花節へ、さらに近現代の小説や戯曲へと続く、物語の源流がそこにあります。

再生の物語を求めて 台地の門前から 今に続く語りの世界

中世、宗教都市だった四天王寺
苦しむ人々を迎え入れた救済の地

上町台地北端に難波宮があった時代、四天王寺はその南に位置する中核施設でした。中世に入り、周辺を合わせて一つの宗教都市を形成して、約、十五世紀の史料によると、周囲には七千戸の家があったと推定。門前には宿もあり、熊野街道の通り道で、熊野詣での旅人たちが往来しました。四天王寺は、様々な時代に、庶民の厚い信仰を集めるとともに、聖徳太子の遺徳を継いで、社会からこぼれ落ちる苦しむ人々を迎え入れる最後の拠り所にもなりました。



「一遍聖絵」に描かれた中世の四天王寺

踊り念仏で知られる時宗の開祖、一遍上人が衆生済度のため念仏を民衆に配りはじめたのは四天王寺の西大門の前。「一遍聖絵」巻2には、中世の四天王寺と一遍上人の活動が描かれ、西門の西方(左)には木の大鳥居(石造は1294年から)があって、その西側にすでに砂浜と海が続く。(「一遍聖絵」の模写本、第2巻★)

漂泊の末に辿り着いた再生の地



①「せつきやうさんせう太夫」挿絵
四天王寺西門前で、落着いては厨子王が阿闍梨に出会い立ち上がる。(江戸時代の説経正本(1656年)、近代の複製本★)



②「安寿と厨子王」
戦前・戦後に出版された講談社の絵本シリーズ。

**父を探し高野へ
向かう「かるかや」の系譜**
この話は、中世の説経「かるかや」⑨をはじめ、江戸時代以降、浄瑠璃、歌舞伎、読本などのかたちで作品化されている。妻子を捨てて出家した武士、町裏道心とその息子石重丸の物語で、父を知らずに育った石重丸は母と共に父親探しの旅に出る。父らしき者がいるという高野山に向かう旅の途中で、二人は上町台地を通る。

「さんせう太夫」の系譜

今も知られる「安寿と厨子王」の物語は、説経「さんせう太夫」①などが元になっている。説経節では姉弟は騙され人買いの手に落ちるが、厨子王は安寿の犠牲により奴隷の身から脱する。しかし、すぐの再起はならず、流浪し落着いた末に四天王寺に辿り着く。そこで厨子王は再生の道を歩みはじめ、やがて出世して人買いに復讐を果たす。森岡外(山椒大夫)②(1915年)はこれに材を取ったもので、近代的な解釈のもと残忍な復讐譚の趣は薄れている(そのためここには四天王寺の場面は出てこない)。その後もこの物語は児童向けの読み物や絵本③になり、また映画化④もされている。

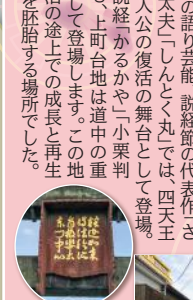
山椒大夫・高 ②森岡外「山椒大夫」
岩波文庫の表紙装丁には説経本の挿絵が使われている。



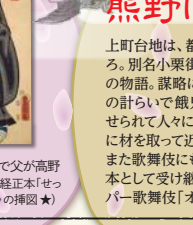
③映画とアニメーション
溝口健二監督の「山椒大夫」は1954年、第15回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞。アニメ映画「安寿と厨子王丸」は1961年公開。(現在のDVDのパッケージ)



中世の語り芸能 説経節の代表作さんせう太夫「しんとく丸」では、四天王寺が主人公の復活の舞台として登場。また、説経「かるかや」・小栗判官でも上町台地は道中の重要な地として登場します。この地は、漂泊の途上での成長と再生の物語を胚胎する場所でした。



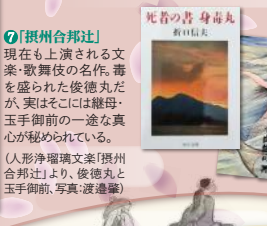
④熊野に続く聖なる道筋「小栗判官」の系譜
上町台地は、都から熊野に向かう熊野街道と通るところ。別名小栗街道とも呼ばれ、その由来となったのがこの物語。謀略により毒殺された小栗判官が、閻魔大王の計らいで熊野阿弥となつてこの世に戻り、土車に乗られて人々に引かれ、熊野の地で復活を遂げる。これに材を取って近松門左衛門は「当流小栗判官」を書き、また歌舞伎にもなり、絵巻⑩に描かれ、仮名草紙や読本として受け継がれた。近代では講談でも語られ、スーパー歌舞伎「オグリ」ほか舞台作品にもなっている。



絶望から救いの光が射す場所へ



⑤「せつきやうしんとく丸」挿絵
絶望して眠りにつた、しんとく丸の枕元に清水の観音が現れる。(江戸時代の説経正本(1648年)、近代の複製本★)



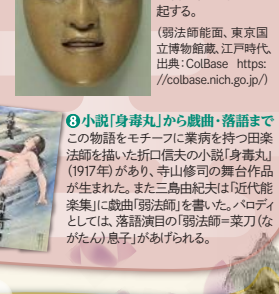
⑥「罪状判官」
江戸時代に描かれた「小栗判官絵巻」では、戦鬼阿弥になった小栗判官は熊野を目指して途中上町台地を通る。「小栗判官絵巻」伝岩佐又兵衛、第13巻第24段 天王寺、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵)



「しんとく丸」の系譜

河内国高安の長者伝説を元にした説経「しんとく丸」⑥では、主人公は継母の呪いによって宿病に侵され、絶望の淵に陥る。しかし四天王寺を重要な舞台として、許嫁の乙姫の献身的な愛と観音の霊力によって救われ、最後は父とともに河内に帰ることになる。「しんとく丸」は「俊徳丸」「信徳丸」などと書き表され、同じ伝説に材をとった話が「能(謡曲)「弱法師(よろし)」⑦、浄瑠璃・歌舞伎の「罪状判官」⑧となり、これに発展されて、現在に至るまで文学作品「身毒丸」⑨や戯曲など、様々な形で展開されている。

⑦「罪状判官」
業病におかされ弱法師と呼ばれる主人公俊徳丸が、盲目の身で春夜彼岸の四天王寺で悉皆成仏の浄土を想起する。(弱法師能面、東京国立博物館蔵、江戸時代。出典：ColBase <https://colbase.nich.go.jp/>)



⑧小説「身毒丸」から戯曲・落語まで
この物語をモチーフに業病を持つ田舎法師を描いた折口信夫の小説「身毒丸」(1917年)があり、寺山修司の舞台作品が生まれた。また三島由紀夫は「近代能楽集」に戯曲「弱法師」を書いた。パロディとしては、落語演目の「弱法師」-菓刀(なかつた)息子があげられる。



語りの力再び、喜怒哀楽を分かち合う

その昔、動亂の世を生きた人々は、救いと再生の物語を求めて、上町台地を行き来しました。物語を求める市井の人々の層の暑さ、豊かな喜怒哀楽の風土こそ、さまざまな芸能・文化を生み出し育んできた、大阪・上町台地の力ともいえるでしょう。今、再び、大きな社会の変化の只中で、直面する格差や分断、孤立の闇を越え、人々の心を和らげ、頬をほころばせ、成長や再起を支える、無縁平等の広場のような場所が必要とされているのではないのでしょうか。そんな想いを抱いて、まちのなかに目を向けてみるとどうでしょう。一人ひとりの人生に寄り添い、喜怒哀楽を分かち合う、この地ならではの語りの場が唄っていることに気づかれます。

大正芸術劇場 2

路地の暮らしの中から新しい物語を紡ぐ

楽しく遊びながら、大阪の演芸のルーツ「俄」の再現を目指す

●今、私が祖先からの贈り物である古い長屋を「大正芸術劇場」として活用しているのは、路地暮らしの基本「おかげさま」の気持で、地域の人たちにも役立てていただきたいと思ったからです。名付け親は「近所のおじさん」で阪大の橋爪節也教授、看板文字は高津宮の小宮真功宮司によるもの。そのご縁で高津宮の「とこしえ秋祭り」にはお旅所として前の路地で演芸の奉納をしています。

その際、東西屋の林幸治郎さんも「俄（にわか）」を演じてくださった。俄（仁輪加、二〇加なども書く）は、即興でそこにあるものを使っておもしろいことをする芸。林さんに話をすると、チンドン屋も俄も路上の芸だと言って、その復活に賛同してくださった。実は父の秋田實も生前、俄について資料を集めていたが、俄師の芸が近代の劇場演芸のルーツの一つだということでした。

内容は歌舞伎のパロディなどが多く、一般人の人も即興でやったそうで、例えば住吉神社のお土産の竹馬に空の小さな酒樽を括り付けて提灯に見立てたり、衣装も羽織を履いて袴に見せたりしました。もちろん観る方も歌舞伎の場面を皆が知っているからおもしろい。だから現代に昔のままに復活させてもおもしろくない。俄の本質はやはりその場の即興性で、演じる人と観る人の両方がいて成り立ちます。要するに場が大事ということで、私たちも、ご縁を大切に、この路地で機嫌良く遊んでいるわけです（笑）。（藤田富美恵さん談）



藤田富美恵さん（児童文学作家、藤田カルチャー・心療福祉大学講師）

大正芸術劇場：藤田さんの家の裏路地にあった明治時代の三軒長屋を改装。かつての「大正時代」に思いを馳せ、この路地と建物を文化の力で活用しつつ保存しようというプロジェクト。



高津宮秋祭りの演芸奉納で俄の怪口「名島名木」を演じる林幸次郎さん（ちんどん通信社、東西屋）



建物内部はフリースペースとして改装。定期的に寄席などが開催されている。

再生の物語を求めて 台地の門前から今に続く語りの世界



隆祥館書店 1

物語の力で母と子のつながりを育む

ママと赤ちゃんのための集い場づくり

●臨床心理士の方を講師に、毎回8組ほどのお母さんと赤ちゃんに集まってもらって、子育てママの「集い場」づくりをしています。二村知子さんはこのまちの小さな本屋ですが、地域に開かれた書店を心がけていて、近所のお母さんたちとも連れで気軽に立ち寄ってくれます。ただ、お話をしていると、初心者ママさんにとっては、テレビやネット、SNSなどで、アクセスできる育児情報はたくさんあるのだけれど、実際の生活では、日々なんとも言えないことで大変さが募って孤立感に包まれ、表情も陰しなくなりがちなのだそうです。だから、そんなママたちの悩みを聞くだけでも少しは気分が楽になるのではと、絵本を通した集い場づくりをしようと思ったのが始まりでした。毎回、最初に絵本の読み聞かせをし、創作の時間では、赤ちゃんや乳幼児が楽しめるようなものを作ります。残りは、子育て相談の時間です。読み聞かせでは、ほんとうに赤ちゃんたちの反応がはっきり見て取れます。例えば「くつついた」の絵本では「おかさん」とわたしが「くつついた」の場面になると、5か月の赤ちゃんの目が輝くのがわかります。同時にママたちの顔もすべしふんわりとかわかっているように思われます。（二村知子さん談）



二村知子さん（隆祥館書店店主）



隆祥館書店：本を読む楽しさを伝えるまちの本屋として、作家と読者の集いをはじめ様々な企画や地域に根ざした活動を展開。絵本の読み聞かせの会もママと赤ちゃんのための集い場のひとつ。

2016年に始めた「ママと赤ちゃんのための集い場」は、現在毎月開催している。

五丁目桂文枝の碑（高津宮） 5

高津宮が舞台となった上方落語には「高津の富」「崇徳院」「高倉狐」などの名作が数多い。現在、境内に設けられた「高津の富」では定期的な落語会も開催されている。また「上方落語四天王」の一人、五丁目桂文枝（1930-2005）の碑が境内に建つ。石材は、創作落語「熊野詣」にちなみ、新富の花園若で、題字は三代目桂春園によるもの。



米澤彦八碑（生國魂神社） 6

江戸時代、生國魂神社では大道芸人たちが小屋掛けをし、その芸を競った。その一人で「当世仕物真似」興行で元禄期（1688-1704）に活躍したのが、上方落語の始祖と言われる米澤彦八。これにちなみ毎年9月、境内で「彦八まつり」が開催される。また、大阪与七郎（説経与七郎）も同地で寛永の頃（1624～44）に人形を取り入れた操り興行を始めたという。



一心寺日曜学校 3

講話とともに語りの芸が心に深く響く

来訪者の人生の安らぎの広場でやりたい

●お寺の存在理由を考えると、基本的には「世のため人のため」という信念が私にはあります。それゆえに一心寺では、お骨仏を造立し、法要などに求められる方々にと、様々な施設の建設や拡充を進めてきました。日曜学校もそうした信念による活動の一環です。内容としては、聴講だけでなく、皆さんには道の掃除や募金活動などにもご参加いただいています。（高口恭行さん談）

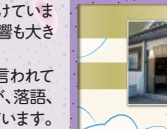
●毎回、講話に加えて演芸や様々なエンターテインメントの時間も設けています。人気が高いだけでなく、その内容には心に響くものがあるようで反響も大きいですね。（横瀬尚隆さん談）

●説経節や落語などの語り芸は、寺での法話の一つのルーツだとも言われています。日曜学校では、私自身も小説などの朗読をすることがありますが、落語、講談、浪曲などのほか、演芸的なものをみなさん本当に楽しみにされています。（高口真吾さん談）

●仏教の教えも真面目な話ばかりでなくて、本来は楽しくあります。笑うというのが何よりも大切なことです。参加者の多い方は、単に慰安を求めて来られるだけでなく、人生の悩みを抱えつつここにやってくる。だから、私は、施設であれ、心のなかであれ、人が安らかに集うことができる広場をつくりたいと願っています。（高口恭行さん談）



一心寺日曜学校：毎月第4日曜日の早朝から三千佛堂で日曜学校を開催。講話の前に、毎回音楽、演芸などのコーナーを設けている（コロナ禍で2021年度は休止したが、今春の再開を現在検討中）。



一心寺は演芸に関わりが深い寺。南会所では毎月恒例「一心寺前浪曲寄席」が開催されている。また、一心寺境内や三千佛堂の地下にある一心寺シアター倶楽部を中心に、下町界隈で毎年4月に開催される「なにかわん形芝居フェスティバル」は上町台地の春の風物詩となっている。



左から、高口真吾さん（一心寺文化事業財団理事）、高口恭行さん（一心寺長老）、横瀬尚隆さん（一心寺三千佛堂主任）

てんじ村記念碑 11

かつて西成区山王町にあった「てんじ村」。新世界に近く、劇場の出演者の芸人たちが1950年代には300人以上住んでいたという。難波利三が直木賞受賞作品の「てんじ村」で描いたことでも知られる。現在、秋田實の「てんじ村記念碑」が阪神高速の阿倍野入口横に建つ。



てんじ村記念碑

一般社団法人てつくり紙芝居館 4

紙芝居は、創作と語りと場との総合文化

使いながら伝承したい、紙芝居に込められたそれぞれの物語

●ここでは、印刷、手描きなどのジャンルにこだわらず、紙芝居の関連資料を保存しています。その中には手持ちのものを全部預けてくださった街頭紙芝居のおじさんの自作の作品もあります。それぞれに深い想いが重ねられているようですね。そういって紙芝居をただ保管するだけでなく、使って生かしながら伝えていきたい。対象は幼児から大人まで、高齢者向けのものもあります。また、ドイツの仲間（クルマルン校）川口ユリア）もいますが、紙芝居は国際的にも注目され、最近海外への普及の機会も増えています。（大塚珠代さん談）

●紙芝居も日進月歩しています。今流行のお笑い芸人さんのフリビブ芸は、紙芝居の特性を生かした芸能の一つとも考えられます。また、ある書物に書いてあったのですが、紙芝居の本質は、絵と演者、演者と観客、そして観客同士の交流を図る「場の文化」にあるということです。この三つの関係性からなる空間が、楽し感じられれば感じられるほど、「場の文化」が一層深まってくる。（山口文子さん談）

●最近リモートでもするのですが、いつも何か足りない思いがあります。大勢の人が小さな画面や演者の語りにつまみこまれるときに感じられる素直な喜びが原点で、独特の時間と空間がそこに生まれてくるのが一番の醍醐味です。（大塚珠代さん談）

一般社団法人てつくり紙芝居館：坂電電気軌道「帝釈山」駅 12

「帝釈山」駅に駅する場所に2020年に開設。毎週火曜日はカフェの日で、紙芝居と駄菓子屋を兼ねて近所の子どもたちが大勢やってくる。出張紙芝居も盛況で、最近はそのほかの上演も行っている。



左から、高市香穂里さん、山口文子さん、大塚珠代さん、三本草代さん（一般社団法人てつくり紙芝居館）